

# 古賀郷土史研究会通信

発行日

令和6年 3月15日

通信 (第22号)

## 「龍ヶ崎」の地名由来

古賀市庄地区のサンコスモスから、東に向かうと、「龍ヶ崎」という地名があります。そこには綿津見神社が鎮座しています。明治五年(1872)の神仏分離令により難陀龍王社から綿津見神社に改名しています。「筑前国統風土記拾遺」の庄村の項に「難陀龍王社、村内にあり」と記しています。難陀龍王社は龍神様で水の神、雨ごいの神、海上安全の神とされています。また「綿津見神社明細帳」には「田園の中に佇立(ちようりつ)せる丘陵上にあり」とあり、丘陵地の岬状の高台に社殿があつて、岬状の高台に難陀龍王社が建つていたことから龍神様が鎮座して居るといふ理由で、「龍ヶ崎」の地名がついたと云われています。

「龍ヶ崎」の地形は高台の地で、北側は低地が広がっています。庄村では水不足に悩まされていたのでしょうか、雨を降らせる龍神を祭つたのでしよう。綿津見神は総本宮が志賀海神社で祭神は海神で、水神との関係があつたのでしよう。

(飯島勇一郎)

## 芦屋釜と清瀧寺の釣り鐘

2024年十月三十一日の西日本新聞に国重要文化財の芦屋釜「芦屋霰地真形釜」(あしやあられじしんなりかま)が「芦屋釜の里」で一般公開されると掲載されました。芦屋釜は十四世紀の室町時代にかけて京都の公家などに好まれ名品で、国重文の茶釜9点の内、8点を占めるほどです。

芦屋釜の里では十五世紀初めの室町時代に芦屋町で鑄造された国重要文化財の「芦屋霰地真形釜」を展示するそうです。故郷での常設展示は初めてだそうです。「芦屋霰地真形釜」は保存状態が良く、芦屋町は2020年に固人から2億7500万円で購入したそうです。ぜひ芦屋釜の里に行ってみてはいかがでしょうか。

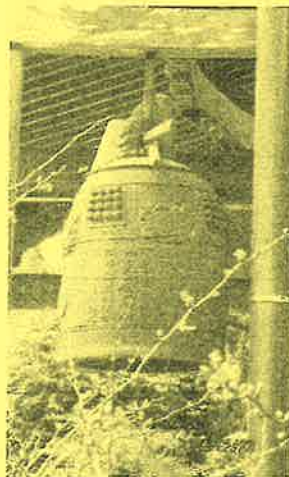


芦屋にいた芦屋鑄物師(あしやいもじ)は南北朝初期から江戸初期頃まで活躍した鑄物の専門集

団で主に梵鐘、香炉など仏具を製作していたようです。この頃に戦後紛失した薦野の天降神社の鐘が製作されています。天文六年(1537)に鑄匠・大江宣秀が製作したことが「太宰管内志」に書かれています。大江宣秀製作の梵鐘が山口県の興隆寺にあります。現在、国指定重要文化財になっています。

天文二十年(1551)に大内氏が滅亡すると、芦屋鑄物師は庇護を失い鑄物師たちは各地へ分散していきます。芦屋鑄物師の一派は博多に移り住み、博多鑄物師として活躍し、太田から山鹿へと名字を変え江戸時代を通して様々な作品を製作したそうです。

古賀市薦野に古寺の清瀧寺が静寂な雰



清瀧寺の鐘

囲気の中にたたずんでいます。本殿の横には姿のよい鐘が下がっています。この清瀧寺の鐘は文政九年(1826)に鑄物師・山鹿五次平包富が製作しています。天文六年(1537)に大江宣秀が天降神社の鐘を製作して以来、芦屋鑄物師の流れをくむ末裔の方である山鹿五次平包富が製作しています。天降神社の鐘といい清瀧寺の鐘とも、何か芦屋釜との不思議な縁を感じます。

(飯島勇一郎)

## 三大開発と三度目の泥海化

### 古賀の災害史料と先史地質の学び

20年前(2005年)の3月20日午前10時53分に発生した福岡西方沖地震。古賀市は震度5弱だったが自宅にいた私はその瞬間、近くに航空機が墜落したかのような錯覚に陥った。

自然災害に襲われることが滅多にないといわれる古賀市だが肝心の災害記録は少なく、今回は2件の史料と地質調査研究から2級河川の下流域一帯が令和の古賀市三大開発の同時進行と引き換えに三度の「海と化す」事態を引き起こしかねない。平穩無事を願いつつもそう読み解かれてならない。

まず第一に享保17(1732)年の筑前国横大路家古文書は「去五月十日大洪水之變有り(中略)今在家、庄、席内、鹿部の四カ村は海のごとし」と後代へ伝えられる。その集落は青柳川と大根川の中流から下流域にかけて古賀平野を指すこととはいうまでもないが、この古文書は2017年、郷土史家が見出すまでは埋もれていたようだ。

第二は、村山武日記(広報こがまち掲載)は昭和28(1953)年6月5日から6月29日までの豪雨続きの大水害を記録している。「大根川、谷山川、青柳川が次々に増水、氾濫をはじめた。地元住民の決死的な水防作業も及ばず70カ所が決壊、耕地200町歩が埋没」、「ただ『ぼう然』各地の被害ひどし」、「21日からの降雨量657mm。被害の見当もつかない。」と記す。20年後の1973年の同紙は鹿部山周辺の平野部のモノ

クロ写真を掲載し「水害で大根川下流域一帯が泥海になった」と惨状を報じている。

### 同地的な豪雨で土砂が堆積した痕跡

その後、河川や橋梁の改修工事が行われ、今日に至っているが近年の地球温暖化による異常気象によって、朝倉豪雨災害など過去に例を見ない甚大な規模へと変ぼうしている。ここで古賀市の河川上流の山地災害を憂慮した識者の見解を紹介する。2002年度古賀市の自然環境調査で現地に入り、地形地質分野を執筆された下山正一氏は2017年に以下の通り明かされた。「古賀市の東部山地は結晶片岩類の急傾斜地であり局地的な豪雨があれば一気に谷底に集中し鉄砲水となって下流に流れる。山地の土壌は薄く斜面にあるので水に満たされ、重力で下方に滑りやすく土石と樹木が混在し下流に流れ出す。古賀市の典型的な壮年期地形のV字谷の中には土石はほとんど残っていない。中流域の地質は土石流堆積物で過去からの山地大洪水を暗示している」と。



谷山の山肌 2024年



2100年の天気予報。2024.12.8

### 林地と耕地の開発のしっぺ返し

いま、古賀市の東部地域の青柳地区に目を向けると九州自動車道古賀インターの交通要衝の地の利を生かした新原高木地区で27・7ha、大内田地区19・9ha、今在家地区で17・4haなど合計約64ha丘陵地、平野部の大規模な土地利用転換、開発工事が同時進行でその面積は1953年の大水害で埋没した耕地約200haの3割に相当する。また市街地唯一の鹿部山(標高約62m)から約4・5km先に過ぎない位置に山肌が露出する古賀ダム背後の谷山採石林地開発もかつてない三大開発と一体化した景色として否応なしに一望できる。この未曾有の土地利用転換は古賀市の企業活動を飛躍的に高めるであろう。しかしその一方で保水機能を有する山地を減少、雨水を溜め下流域の増水を抑制する自然ダムの機能を果たす広範な水田をも失なったことになる。

### 大根川流域の危険度を知る

県は大根・谷山・青柳・薬王寺、米多比川の5支流をひっくるめて「大根川流域」と呼称し終末は花鶴川として玄界灘に注ぎ込む。その浸水危険度は高くないのだろうか。昭和期の災害の文献記録のみならず地形地質から検証が可能な古賀市の災害の痕跡を今一度、振り返ることも必要なのではあるまいか。

(会員 吉住長敏)

連絡先 飯島勇一郎(会長)

☎(092)943-6850